

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 樋口一葉『たけくらべ』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 57 回のツイキャス読書会の課題図書は、樋口一葉の『たけくらべ』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『たけくらべ』 感想文

私は、樋口一葉が五千円札になった時に初めて読みましたが大ざっぱ感じで覚えているだけでしたので、今回読んでも分からない所も多かったです。

そのときは現代語訳も付いていたと思いますが、今回は原文で頑張ろうと思って言葉の意味など調べながら読んでいたのですが、最初のほうに出てくる遊郭の関係の仕事をしている男の人について書かれている所が読み違いをしている事が分かって、潔く現代語訳で読み直しました。

原文では文章の美しさなどが味わえるそうですが今の私には無理なので少し残念に思いました。

今とは違う所も、もちろんありますし、美登利が遊女になるのはすごく悲しすぎるし特殊かもしれませんが、将来がなんとなく決まってしまうというのは、現在でもよくある事のように思いました。

家庭の事情で大学に行く費用を出してもらえない場合、奨学金制度で借りて後々そのお金がのし掛かってくるような状態であったり、

また、裕福であっても親の望む通りに生きなければいけない人も多いのではと、そんな事を思いました。

今の、美登利や信如がたくさんいるんだろうなと考えると悲しい気持ちになりましたが、美登利のように作り花の水仙があれば少しは救われるのかなと思いました。

(おわり)

逃げちゃダメだ、ができない

街があればそこに盛り場も生まれ、そこで働く人達、家族、それに関連する業種の人達も集まる。それは古今東西を問わず、例えばアマゾンの奥地の山の中の金鉱掘りの男達を相手に売春婦が集まってくるそうです。

落語の世界で吉原の花魁は借金のかたで売られてきたなどというマイナスイメージよりはむしろ艶やかな文化の中心。商家の放蕩若旦那が花魁遊びをしたくて店の金を勝手に使い込み、旦那と番頭を困らせる、なんて話が私が聴いた噺だけでも多くある。

たけくらべに出てくる少年少女達は見えない鎖に繋がれているような気がした。

いじめられキャラの三五郎はずっといじめられキャラがお似合いで、借金取りの家の正太郎は「俺だって本当は厭なんだ」という思いを抱えながらもばあちゃんの為にも頑張って働くと言い、喧嘩を起こした鳶職の息子の正吉もやはり将来は鳶職になって「あれは仕方がなかったんだ」と言い訳しながらこれからも喧嘩をするのだろう。

龍華寺の和尚でそろばん勘定大好きな親父を持つ根暗な信如も仏門の世界に入ることを約束され、大黒屋一の廊の妹美登利もやはりその世界に入っていく。

皆自分が見えない鎖につながれている事に気付き始めても、自分をごまかしながらやがて大人になっていく。

物語の終盤、美登利が元気をなくしたのはキルケゴールの死に至る病でいうところの、絶望の第二段階の状態になったのかなと思った。いつまでも夢見る少女じゃいられない、これから自分の身に起きる現実を突き付けられわかっていたこととは言え混乱しているのではないか、と推測しました。

中学生のころから女子の気持ちはわかりませんが。

(おわり)

春を知ル、仏門に入ル。あの日の水仙は永遠に咲ク。

このあたりは鷲（おおとり）神社のお膝元なので、霜月には酉の市がある。商売人はみな、縁起物の熊手を造って祭りに向けるが、欲深く金儲けができるほど器用ではないらしい。江戸の風情が色鮮やかに描かれ、色町に暮らす子どもたちが、生き生きと駆ける。威勢のいいケンカの相談と妙に大人びた艶っぽい冗談。くすりと笑ってしまう正太のあどけない口調や、長吉の無骨さと裏腹の人情の篤さは、本当にこういう子ども達がいたのだろうなと眼に浮かんでくる。読み始めから、たおやかな一葉の観察眼に引き込まれた。

末は花魁、末は僧侶。美登利と信如は、互いに惹かれつつ、恋として淡い気持ちが芽生えるころには、もう後戻りのできないそれぞれの道へ進まなくてはならなかった。生まれた家がそうだったから、誰かを恨むこともできず、そこから逃げるわけにもゆかない定められた人生。明治 29 年はそれなりに不自由だったんだと思う。

信如のこさえた水仙は、寺の内職に使っていた熊手の材料。あの雨の日、鼻緒を直すのも不器用だった信如が、きつと苦心しながら丁寧に造った水仙。意地の張り合い、互いの揺れる気持ちがほのかに見えて、二人の恋の顛末に自然と泣けてくる。

「 わがものと 思えば 軽き傘の雪 恋の重荷を 肩にかけ
芋狩り行けば 冬の夜の 川風寒く 千鳥鳴く
待つ身に辛き 置炬燵 実にやるせが ないわいな 」

一葉の綴った恋ごころが粋で切なく、芯からやるせない。大人になんかなりたくないって、たしかに 14 歳の自分も思ったっけ。もうそんな気持ちすら忘れてしまっていたけど、あの頃の片想いを思い出して、わたしもちょっと懐かしく顔が赤らんだ。いえ、どちらかといえば苦笑かな。

(おわり)

「あの頃に戻れたなら」

私はいつ頃から社会というものを意識したのだろうか。自分の進路を考え始めた高校生の頃だろうか。

この物語の子供たちは、子供の頃から早々に社会を意識せざるを得ない環境にある。貧しいが故に子供も立派な働き手となるからだ。そして親の社会的立場の関係が子供の世界にも強く影響を及ぼしている事に驚く。それがとてもせつなく思えた。

美登利はわがままいっぱい大切に育てられている。子供達の間でも美人で姉御肌の美登利は人気ものだ。美登利自身も幼少の頃は親の職業になんの疑いもたず、親孝行してる花魁である姉の大巻を誇りに思っている。

しかし嶋田の鬘を結ったその日から 美登利は急に大人しくなる。誇り高き女王様だった美登利は急に自分を恥じるようになる。遊女という職業がどんなもので、自分がこれから花魁として生きてく以外に道がないことを美登利が初めて知ることになったためと私は解釈した。

初めて芽生えた信如への恋心はどこに向けたらいいのだろうか？きっと自分の事を信如には知られたくないとおもいうに違いない。だから外の世界と断絶したいと思ったのかもしれない。成長とともに強くなる自我の芽生えを無理やり心におしこめなければならない美登利の気持ちを思うと私はせつなくなった。

未来に辛い事しか抱かなければ、なんのために生まれてきたのだろうかと問いかけたくなるだろう。私なら親を恨むかもしれない。何も知らなかった幼い頃に戻って無心に遊びたいと願ったのは美登利が将来に絶望したからだと思う。

物語の最後に水仙の造花を投げ入れたのが信如だとすれば、優しかった美登利にすぎなくした事を後悔したからではないかと思った。美登利が信如に花を折ってくれとせがんだ事を思い出し、枯れることのない造花を美登利に贈ったのは信如の優しさだと思った。

(おわり)

『ため息』

美登利がある日を境に、「物いはず格子のかげに小隠れて、さりとして立去るでも無しに唯うちと胸とどろかすは平常の美登利のさまにては無かりし」
になった。

どうい背景かは分からなかったが、美登利に何かがあったこと、それは性に関する事であるように感じた。ネットで調べると、それにまつわる論争があり、処女喪失説があるようだ。

小説では、突然美登利の態度が変化した「状況」が三人称で語られているから、美登利の心情は読み手が想像を膨らませるしかない。もし、処女喪失したことを描いているなら、私は「残酷だ！」という感情が沸き起こるのを禁じ得ない。たちまち親目線になってしまう。美登利の母は何を思っ一人ほほ笑んでいたのか。

信如への淡い想いを抱いていた美登利だから、この出来事は美登利の気持ちとは裏腹に、何か社会的な背景があったのだろう。

生活がかかっているとか、お職女郎への通過儀礼とか、あれやこれやとあったにせよ、美登利が感じた現実への痛みに、少なくとも私は気持ちが分裂しそうだ。

昔は、お家の取り決めで結婚がまとまって、女性は「夫に身を捧ぐ」のが自然の習わしだったと仮定すると、それとは一線を画する世界に足を踏み入れる美登利。幼馴染の正太とも、僧侶の道に進む信如とも、さようなら。こうなったら潔く、己が道を見せつけてやると、プロ根性で生きるしかない。時に湯帰りにため息混じりに満点の星空を仰ぎながら。

ただしかし、正太を前に、「帰ってくれ、お前が居ると私は死んでしまうであろう」と美登利は言った。そのぶん、正太がモロにうろたえる純粹さが際立つ。

助演者正太と美登利のため息のアンサンブルが、とっても切ない。 そんな読後感だった。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 端境期 』

「はじめはみんな子どもだったのだから。(でも、それを忘れずにいる人は、ほとんどいない。)」

サン＝テグジュペリ 「星の王子さま」より

幼き頃は、子供時代を「絶対に忘れるわけがない。」と思っていた。でも、この一節がグサッと刺さる大人になっていた。大人は全員持っているはずの子供時代。

それも、大人になる直前の一番揺らく時をこの小説は、チクチクする胸の痛みと共に呼び覚ます。

私の初恋は、小学三年だった。相手は、勉強もスポーツもよくできるスラっとしたT君だ。ある日、同じ系の男子が休んだ時、T君がピンチヒッターになってくれた。私は、顔が赤くなるくらい嬉しかったのに邪険にしてしまう。その後、私の転校でジ・エンドだが、友人を介し中一の時に彼が写る写真を見た。少し成長したT君は、さらにかっこよくなっていて、なぜかほっとした。

こんな記憶を引き出させた美登利と信如。正太では顔は赤くならないが、信如の気配だけで赤くなる美登利。普段は美登利を避けられた信如だったが、鼻緒が切れるハプニングで、美登利の家の前から動けない。お互いの気配だけを固唾を飲んで押し量る状況が胸に迫る。ただの小学生だった私と違い、すでに二人にはルールが引かれている。遊女と僧侶では将来に交わることは決してない。他の子供たちも金貸しや鳶など、何の利害関係もなく交われるほんの短い時期の刹那的な恋が切ない。

大人の事情から腰の低い父親に、事実を話せない三五郎。鰻を食べる父親を僧侶として恥ずかしく思う信如。それは、まだ大人になる前の純粋な感情だ。大人になれば、偽善や私欲にまみれていく。たぶん、美登利と信如だってそうだろう。

島田を結った美登利に、水仙の造花が届く。信如であることが示唆されているが、一年早く仏学校に行くことになったのは、美登利が関係しているように思えてならない。最後まで、お互いに触れることのなかった恋。他の大人のように、二人は忘れることはないだろう。

晩秋から初冬にかけての端境期は、季節の中でも美しい紅葉の時期だ。人生における端境期は、子供から大人に変わる時期だろう。季節と違い、一度しかない人生の端境期。大人になってしまえば、経験と分別で揺れることはない。取り戻せないから、尊く感じるのだろうか。この小説は、ちょうどその景色を切り取ったように感じた。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

「紅入りの友仙の切れ端」

『たけくらべ』の子どもたちは、この街で家業をつぎ、労働力を商品として再生産する賃労働者として成長する。廊を中心に資本が回転し、表町と横町の生活が維持されて、彼らは、無邪気な子どもの世界から没落していく。

『意志とは没落する現象の核心である』とショウペンハウエルはいう

登楼し、自らの肉体を商品として売り出した美登利は、『此處しばらくの怪しの現象(さま)に我れを我れとも思はれず』それは、花魁としての没落の始まりであり、彼女の意志の終わりの始まりである。

社会的生産関係に足を取られるように、信如は、泥に足を取られ、鼻緒を切った。雨に濡れ苦悶する信如を心配し、美登利は、寮の格子から、紅入れ友仙の切れ端を投げてよこす。そのあざやかな切れ端を、あくまでも無視し、泥の中に打ち捨てて、去っていく信如。

世俗の泥に汚れていく紅入りの友仙の切れ端。それは、美登利の没落を象徴していた。

副業で儲けながらも経を読む父の俗物ぶりが信如には心苦しかった。美登利は、また、そんな生臭坊主の子に世話になる気はさらさらになかった。

しかし、物言えぬよう運命づけられた二人の世俗での淡い恋愛感情の背後に広がる世界がある。もし仮に美登利の人生が、はかなく潰え、信如が彼女のために回向することがあれば、打ち捨てられたあの時の紅入りの友仙の切れ端を拾い上げなかった信如は、亡くなった美登利の何を拾い上げる役回りなのだろうか？

たけくらべしていたあの頃は遠く、みんな抗いがたい資本の自己増殖の運動に巻き込まれて、子供時代から没落していく。

大人になることは、現象として没落することだ。

美登利の目の前に、一輪ざしに差され、淋しくも清い姿をたたえている造花の水仙は、紅入りの友仙の切れ端のように汚れ、没落していく美登利への、信如によるせめてもの回向だった。

美登利が、もうかつての彼女に戻らないように、信如もまた、この世俗に、永久の別れの覚悟を決めたとすれば、彼は、独りで仏門を叩いて、開けた。

なぜなら、没落しながら鬼火のようにゆらめく現象の背後でも、意志の核心は、不滅であるからだ。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343